



京大広報

No. 701

2014.6



クロックタワーコンサートを開催 ー関連記事 本文4203ページー

目次

〈大学の動き〉

- 京都大学特色入試選抜要項「概要」に関する記者発表を実施……………4202
- 京都大学春秋講義(平成26年度春季講義)を開催……………4202
- 国際シンポジウム“Bordeaux-Kyoto Symposium”を開催……………4203
- クロックタワーコンサートを開催……………4203
- ドイツ・ハイデルベルク大学旧校舎内に「京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィス」を開設……………4204
- 附属図書館ラーニング・コモンズ等オープニングセレモニーを挙……………4204

〈部局の動き〉

- 公衆衛生分野の2年課程修士ダブルディグリープログラム調印式を挙……………4205

〈寸言〉

- 「オタク文化」の世界戦略 西澤 昭男……………4206

〈随想〉

- 二人の友との鳥見 名誉教授 村瀬 哲司……………4207

〈洛書〉

- アメリカ留学から10年が経って 小林 純也……………4208

〈栄誉〉

- 伏木 亨農学研究科教授が紫綬褒章を受章……………4209
- 田中 求物質-細胞統合システム拠点教授が平成26年度フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞を受賞……………4209

〈資料〉

- 平成26年度 入学試験諸統計……………4210
- 平成26年度 総長裁量経費による採択事項……………4215

〈話題〉

- 第20回大学教育研究フォーラムを開催……………4216
- 「インドシナ地域における教育・研究連携に向けた第7回ワークショップ」を開催……………4216
- 体育会による壮行会を開催……………4217

〈計報〉

- ……………4217

〈特集〉

- 「京大ウィークス2013」Vol. 7……………4218

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

京都大学特色入試選抜要項「概要」に関する記者発表を実施

3月26日(水)に、松本 紘 総長，淡路敏之 教育担当理事・副学長および各学部長等の出席のもと、平成28年度入学者選抜から導入する京都大学特色入試選抜要項「概要」に関する記者発表を本部棟5階大会議室において行った。

本学は、平成25年3月26日に、高大接続型特色入試を平成28年度入試から全学部で導入する旨発表した。その後、各学部および関係委員会において、具体的な選抜日程、出願資格、出願要件、選抜方法等について検討を重ねた結果、本概要の発表に至ったものである。

また、記者発表後には、教育委員会・高等学校・予備校・出版社向けの説明会を開催した。本学からは、淡路理事・副学長，中村佳正 理事補，森脇 淳 理事補，惣脇 宏 総長主席学事補佐，土生木茂雄 学務部長および各学部の担当教員等が出席し、各学部(学科)の選抜方法等について説明を行った。

今後、詳細について引き続き検討を行い、出願書類の様式やサンプル問題等について、決定次第速やかに公表する予定である。さらに、全国各地で説明会を開催し、本特色入試の周知に努めることとしている。



記者発表の様子

(学務部)

京都大学春秋講義(平成26年度春季講義)を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63年秋から開講している公開講座である。

今回は、メインテーマを「日本の食を考える」として3回の講義を行った。1回目の4月9日(水)は藤原辰史 人文科学研究所准教授による「20世紀日本の食生活史-残飯、牛乳、フードコート」、2回目の4月16日(水)は河田照雄 農学研究科教授による「食の学び方、活かし方」、3回目の4月23日(水)は加賀爪優 農学研究科教授による「世界の食料需給と貿易自由化・環境問題」と題した講義であった。3日間で1,115名の参加があり、講義後には活発な質疑応答が行われた。

参加者からは「食を改めて考えるのにいい刺激に

なった」、「健康維持のための食の重要性を再確認した」、「自由貿易化のとりえ方の参考になった」などの感想が寄せられた。

今回は平成26年度秋季講義として、9月13日(土)、27日(土)に各日2回の講義を行う予定である。



会場の様子

(渉外部)

国際シンポジウム“Bordeaux-Kyoto Symposium”を開催

5月5日(月)、6日(火)に、ボルドー大学(Université de Bordeaux)との共催による“Bordeaux-Kyoto Symposium”をボルドー大学ヴィクトワールキャンパスを中心とした会場において開催した。平成23年、Campus of Excellenceとしてフランス国内で認定を受けた3校の一つであるボルドー大学と本学が、様々な研究分野において接点を作り、両大学間の国際共同研究の推進に寄与することを目的としたシンポジウムで、本学からは理事、教員、学生、事務スタッフ等総勢54名が参加、ボルドー大学からの参加者約60名と合わせ、2日間で、延べ200名を超えるイベントとなった。

シンポジウムはManuel Tunon de Lara ボルドー大学学長、三嶋理晃 病院・国際担当理事・副学長からの挨拶の後、本学とボルドー大学との間で学術交流協定締結の署名式が挙行された。Vincent Dousset ボルドー大学国際担当副学長と吉川 潔研究担当理事・副学長による各大学紹介の後、本庶 佑名誉教授とGeorges Hadziioannou教授による基調講演が行われた。

午後からは医学、理工学分野のみならず考古学、



両大学役員集合写真 (C) Université de Bordeaux

哲学にもわたる多種多様な分野から集まった研究者が11のテーマに分かれ分科会を行った。またボルドーという地域に根ざしたブドウやワインに関する研究テーマも取り扱われた。本シンポジウムで初めて顔を合わせるようになった研究者たちも、各人の研究発表を通じて、敬意と友情を深め、深い議論が交わされる2日間となった。この出会いを契機として両大学の研究者間相互交流が促進され、国際共同研究の発展、ひいては両国間のさらなる交流進展につながることを期待される。

(研究国際部)

クロックタワーコンサートを開催

本学と京都市立芸術大学が主催して毎年開催しているクロックタワーコンサートを、5月11日(日)に百周年時計台記念館にて開催した。今回は、「続・オーケストラってなんだ?!～オーケストラの魅力10倍教えます～」と題し、京都市立芸術大学アカデミーオーケストラ(大学院管弦楽団)が、J.S.バッハの「G線上のアリア」、J.ハイドンの交響曲第9番、G.F.ヘンデルの合奏協奏曲 作品6-12、W.A.モーツァルトの交響曲第1番およびW.A.モーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を流麗に演奏し、各曲の合間には、増井信貴 同大学音楽学部教授がそれぞれの楽曲の背景や作曲家等についてトークを行った。

当日、会場には500名を超える参加者があり、参加者からは、「若い才能ある院生・学部生の洗練された演奏を聴くことができ、よかった」、「レクチャー

と演奏で音楽の成り立ちがよくわかった」、「新緑を眺めながらクラシックを聴くことができるととても良かった」などの感想が寄せられた。



トークを行う増井教授

(渉外部)

ドイツ・ハイデルベルク大学旧校舎内に「京都大学 欧州拠点ハイデルベルクオフィス」を開設

本学は、強固で確実な国際化を展開するため平成25年6月に策定した国際戦略「2x by 2020」に基づき、ドイツ・ハイデルベルク大学旧校舎内に「京都大学 欧州拠点ハイデルベルクオフィス (Kyoto University European Center, Heidelberg Office)」を開設した。本拠点は、本学の欧州地域における研究教育活動の支援、本学教職員・学生の国際化の推進および広報・社会連携・ネットワークの形成を推進することを目的としており、併せて日独6大学学長会議コンソーシアム(HeKKSaGOn)(※)の日本側窓口としても活用していく予定である。

このたび、拠点開設に伴い、5月3日(土)に学内外の関係者の臨席のもと、開所式を挙行了した。



テープカットの様子(左から植木理事、吉川理事・副学長、三嶋理事・副学長、W. Heermann副学長、板東審議官、岡村理事・副学長)

開所式には、日独政府関係者、HeKKSaGOn加盟大学関係者および在ドイツ企業関係者等、30名余の出席があった。開所式式典では、三嶋理晃 国際担当理事・副学長の挨拶に続き、板東久美子 文部科学省文部科学審議官、Dieter W. Heermann ハイデルベルク大学副学長から祝辞をいただいた。

式典の後、会場のBel Etage正面玄関前において、板東審議官、三嶋理事・副学長、吉川 潔 研究担当理事・副学長、植木俊哉 東北大学理事、岡村康行 大阪大学理事・副学長、W. Heermann 副学長の6名がテープカットを行った。

テープカットに引き続き、ハイデルベルクオフィスおよび、現在は博物館として観光名所となっている旧学生牢(Studentenkarzer)を見学し、その後の記念レセプションは吉川理事・副学長の発声による乾杯にはじまり、和やかな雰囲気、今後の日独交流推進に向けた歓談が行われた。

※日独6大学学長会議コンソーシアム(HeKKSaGOn)は、日本とドイツの主要6大学(ハイデルベルク大学(Heidelberg)、京都大学(Kyoto)、カールスルーエ工科大学(Karlsruhe)、東北大学(Tohoku (in Sendai))、ゲッティンゲン大学(Göttingen)および大阪大学(Osaka))からなる大学コンソーシアムで、研究者および学生の交流、共同研究の推進、サマースクール等の開催など日独大学間の交流を推進することを目的として、平成22年に結成された。

(研究国際部)

附属図書館ラーニング・コモンズ等オープニングセレモニーを挙行

附属図書館ではラーニング・コモンズ等のオープニングセレモニーを4月25日(金)に開催し、赤松明彦 学生・図書館担当理事・副学長、図書館協議員、関係者ら、約50名が出席した。

ラーニング・コモンズは、本学の学生がグループで対話しながら、能動的に学修でき、本学の教育に関する基本理念である「対話を根幹とした自学自習」が実践できる場として、同館1階に設置された。学

生が主体的に問題を発見し、解を見いだす「学びの実験場」となることを期待している。

なお、この施設は、空間全体、調度類、施設中央のクスノキを模した「木造物」等も、本学教員、学生との協働により設計された。

セレモニーでは、北村由美 附属図書館研究開発室准教授の司会のもと、赤松理事・副学長から、ラーニング・コモンズが学生相互の学びの場として活用

されることへの期待が述べられ、続いて、引原隆士図書館機構長から、今回の改修に関わった関係者への感謝の言葉とともに、「本学の持つ様々なリソースを集め種を蒔くことができた。今後は大きく育てたい」と抱負が述べられた。



テープカットの様子
(左から、引原機構長、赤松理事・副学長、寺田副機構長)



クスノキを模したラーニング・コモンスの内装

祝辞の後は、赤松理事・副学長、引原機構長および寺田浩明 図書館機構副機構長らによるテープカットが行われ、その後、新しく出来た施設の見学が行われた。設置に関わった関係者、「木造物」をデザインした学生等も参加し、記念撮影やコンセプト等の質疑応答が行われ、和やかな雰囲気の中で式は終了した。

(附属図書館)

部局の動き

公衆衛生分野の2年課程修士ダブルディグリープログラム調印式を挙行

3月13日(木)、芝蘭会館山内ホールにて、医学研究科社会健康医学系専攻が、マレーシアのマラヤ大学医学部、タイのチュラロンコン大学公衆衛生学部と修士課程ダブルディグリープログラムの調印式を挙行した。同プログラムは、平成24年度採択大学の世界展開力強化事業プロジェクト「人間の安全保障開発」を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築の下で実施される。

調印式には、マラヤ大学医学部から5名、チュラロンコン大学公衆衛生学部から5名、本学からは17名が参加した。



協定書に署名する福原俊一医学研究科教授とSurasak教授

第1セッションでは、本学の赤松明彦 学生担当理事・副学長、マラヤ大学副学長のAwang

Bulgiba Awang Mahmud教授、チュラロンコン大学公衆衛生学部のSurasak Taneepanichskul教授による挨拶の後、同プログラムの協定書の調印が行われた。

第2セッションでは、各大学のカリキュラムおよび現在実施している研究テーマが紹介された。

調印式に続く午後の第3セッションでは、平成26年度からダブルディグリーを実施するため、プログラムの細部についての協議を行った。具体的には、単位互換方法、コースマッチング、学生の宿泊先、ラーニング・アグリーメントの作成方法とフォーマット、修了要件を確認・決定した。

第4セッションではキャンパスツアーを実施し、マラヤ大学とチュラロンコン大学からの参加者が、医学研究科社会健康医学系専攻の各研究室を訪問した。

(学際融合教育研究推進センター
(人間の安全保障開発連携教育ユニット))

寸言

「オタク文化」の世界戦略

西澤 昭男

京大には昭和38年から45年まで7年間在籍した。この間に東京オリンピックと大阪万博があり、経済成長のさ中があったが、学生運動の嵐が吹きまくった時代でもあった。大学院の3年間はほぼ封鎖。バイトと麻雀、同人誌の発刊、そして仲間との議論に明け暮れる毎日だった。結局修論は出さず5年遅れ(2浪の為)で社会に出た。その後2つの小さな会社を経て、昭和51年に大阪で予備校の日曜の空き教室を借りて<塾>を開いた。「日本の教育を変えよう」、「やるからには日本一をめざそう」を合言葉に東奔西走、各地に教室を拡げていった。38年後の現在、37都道府県の333教室に約4万人の生徒が通う大手塾に成長した。しかし初期の目標には遠く、今後もチャレンジが続く。

平成12年にエンターテインメント事業を第2の柱にしようと考え、東京にアニメの会社を設立。教室では教えられない「志」「感動」「感謝」などをアニメの作品を通して感得してもらおうと考えたのだ。子どもだけでなく、大人も楽しめるように実写に近い内容にした。その結果、第一作の「NITABOH-津軽三味線始祖外聞」はソウルの国際アニメ映画祭でグランプリに輝き、二作目の「ふるさと-JAPAN」も映画発祥の地フランスのリヨンでグランプリ、三作目の「8月のシンフォニー」も3年後に準グランプリを獲得した。10年で3作の監督をし、各地の映画祭をまわってわかったことは、世界の若者たちは日本のアニメ(マンガ)を娯楽として楽しむ一方、「愛」「夢」「友情」や「勇気」など生きていく上での大切なことを作品を通して学んでいることだった。マンガをちゃんと読む為には日本語を勉強している人も少なからずいるのだ。一方、日本の若者ファッション、「コスプレ」や「ロリータ」など「カワイイ文化」の人気もものすごく、アニメやマンガ・キャラクターなどを融合した「オタク文化」の一大イベントが世界各地で



開かれている。パリの「JAPAN-EXPO」には毎年20万人を超える人がヨーロッパ各地から集まる。彼らが「オタク文化」を支持するのは平和で豊かで自由な国「日本」への憧れと「遊び心」への共感があるからだ。

平成25年2月、こうした「オタク文化」のありのままを世界に発信したいと考え、インターネット放送局をYouTube上に開設した。秋葉原・原宿・渋谷にやってくるオシャレな女の子にインタビューしたり、日本の様々なイベントを取材して配信したのだ。反響は結構大きく、1年少しで195の国や地域で視聴され、回数は185万回、Facebookのフォロー数は43万件になった。ハリウッドのTV局(UTB)やシンガポールの「ハローJAPAN」では定番番組として放送されており、ベトナムやフィリピン、オーストラリアのTV局との交渉も進みそうだ。第2弾ではマンガやアニメの新作の配信、そして第3弾では伝統文化・魅力ある観光スポット・最新の科学情報などを予定しており、今後が楽しみだ。視聴者の数を圧倒的に上げながらビジネスチャンスを探っていこうと考えている。本来の狙いである教育コンテンツの配信に向けても準備をしていきたい。

「クールコリア」を国家戦略としている韓国には水をあけられたが、日本政府も動き出した。「知的財産推進計画」をもとに5年で1500億円を投資するという。数年前から大学でのマンガやアニメの学科新設も多くなり、自治体も「ゆるキャラ」や「ご当地アイドル」に力を入れるなど「オタク文化」への関心が一挙に高まってきた。問題は才能ある人材の発掘・育成であり、業界の労働条件の改善をどう進めるかである。政府の政策がバラまきに終わらぬよう見守りたい。

最後になったが、国際交流推進機構長の森 純一教授からお話があり「オタク文化」について2年連続で京大生に講演をさせていただいた。京大生のように能力の高い若者が「オタク文化」にも関心を持って世界中の若者と交流し、「志」をもってベンチャーを立ち上げるようになれば。そんな期待を込めて話をさせていただいた。

(にしざわ あきお 株式会社ワオ・コーポレーション代表取締役社長、昭和42年文学部卒業)

随想

二人の友との鳥見

名誉教授 村瀬 哲司

本年3月末をもって、私は46年間の銀行員・大学教員生活に終止符をうち、週一回非常勤講師を務める気楽な身分となった。ところがゴールデンウィークを挟む一か月は、図らずもこの十余年もっとも多忙な時期となった。仕事ではなく、趣味道楽の鳥見に、である。



若いころ、英国にはバードウォッチングなる趣味があると聞いて、鳥を観察して何が面白いのだろうか、と訝しく思っていた。東京銀行で業務に忙殺される年月が流れ、香港支店への転勤辞令が出た平成5年のある日、ラプラタの博物学者として知られるW.H.ハドスン著「鳥たちをめぐる冒険」(講談社学術文庫)を饒別に頂いた。これが鳥への関心と呼び覚ますきっかけとなったが、肉体的・精神的に余裕がない状態では、そこに描かれた世界は現実と結びつかなかった。

その後、京都大学で主に留学生対象に教鞭をとり、定年退職で龍谷大学に移ってようやく、シジュウカラならぬロクジュウカラ鳥見にはまっていた。身近なカラスが二種類いるなど驚きだった。

昨年12月、日本野鳥の会の探鳥会が京都御苑であり、京都大学のTKさん(宇宙物理学)とウクライナのクリミアの天文台から来たEPさんとご一緒する機会があった。EPさんはその直後いったん帰国し、4月に再来日して京大で研究に携わっているが、今や「ウクライナのクリミアから」と単純に言えず、今後のご自身の国籍選択の問題など、予期せぬ運命の展開に立ち向かっている。

TKさんとの出会いは、台風襲来にも似た興奮と刺激を与えてくれた。彼は20年来birdingを楽しんでいる。住まいは東山のふもと、起床時間は明かしてくれないが、午前4時前のような。彼は、birdingの9割は声を聴くことであって、見ること(鳥見)は1割でしかないという。事実、彼は鳥たちの合唱から、あれはキビタキ、今のはヤマガラと聞き分ける。4月後半からの春の渡りの時期には、天気と大学の

事情が許す限り、夏鳥の通過点で有名な大阪城公園に、連日のようにEPさんと私を誘ってくれた。おかげで、目視偏重の私の鳥見が、耳も加わった立体的な世界に組み替えられていった。

EPさんの鳥見歴は9か月である。昨年の京大での研究時に探鳥と写真撮影の虜になって、それまでのデジカメを、遠くの鳥でも撮れるズーム機能つき最新鋭カメラに買い替えてしまった。大阪城公園から戻ってからも夕方、鴨川にでかけてシギ・チドリを撮影し、メールで写真を楽しませてくれる。

異国での慰めになればと、四条のロシア料理店「キエフ」(注:キエフはウクライナの首都)にEPさんをお誘いした。その数日前、私は対馬の探鳥ツアーに参加し、そこで日露戦争の対馬沖海戦に敗れて漂着したロシア兵を島民が世話をしたという記念碑を見た。私がツシマの名前を口にすると、EPさんは、祖父がバルチック艦隊の乗組員で、対馬経由ロシアに生還し、彼女が7歳の時に亡くなったという。乗艦した艦名などは聞いていないというが、日本海海戦の生き残りロシア兵の孫娘とはなんとという奇遇だろうか。

5月中旬の晴れた日、お二人と新緑の比叡山で探鳥を楽しんだ。日本三鳴鳥の一つオオルリが、コバルトブルーの頭、濃紺の背中、純白のお腹を見せて、美しいさえずりを聞かせてくれた。さえずりにはトビとホオジロの物まねも混じっていると、TKさんが教えてくれる。ホトトギスのおなじみの声も遠くから聞こえる。

延暦寺の西塔釈迦堂の前では、ひっそりと建つ石碑の面に次の文字を読むことができた。

時ならぬつはきの花をよろこひてめしろ友よふ山かけの寺

これは京都帝国大学教授で日本野鳥の会初代京都支部長を務めた川村多美二の歌で、鳥たちへの愛情に溢れている。文献によると川村教授は、鳥類学で有名なコーネル大学に留学し、そこでの野外実習に影響を受け、日本で初めて、京大で動物生態学の講義と実習を実施した。この貴重な伝統が、鳥類学の分野で今日も京大に受け継がれているか、ふと気になった。

(むらせ てつじ 平成20年退職 元国際交流センター教授 専門は国際金融論)

洛書

アメリカ留学から10年が経って

小林 純也

私は平成14年10月～16年3月末までアメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー市にあるローレンスバークレー国立研究所に客員研究員・ポストドクとして1年半留学していました。そのアメリカ留学帰国からこの春でちょうど10年、振り返ってみると、思いがけない一度のチャンスが、研究生活・日常生活・人との交流に対する私自身の姿勢を大きく変え、今思えば、アメリカ留学自体が人生の転機だったのだらうと感じています。

私のアメリカ留学のチャンスは突然訪れました。留学1年前の平成13年秋、その頃在籍していた広島大学歯学部の研究室に文部科学省在外研究員派遣制度への推薦依頼が大学本部からあり、研究室在籍まだ3年という私に主任教授から打診がありました。それまで短期の海外出張の経験も無く、辞退するという選択肢もあったのですが、その当時34歳の私には二度とないチャンスと思い、お受けすることにしました。しかし、海外経験のない私には留学先を探す手立てもなかったところ、同じ広大の共同研究者（現在の京都大学放射線生物研究センターにおける上司である教授）に紹介いただき、受入先の研究者の了解も得て、留学先を決めることができました。ただ、留学が内定した直後の平成13年9月11日にはアメリカ同時多発テロがあり、海外経験の少ない私が妻を伴って、アメリカ留學生生活をできるのか、不安で一杯でした。しかし、準備期間の一年はあっという間に過ぎ、平成14年10月1日アメリカへと旅立ちました。バークレーには日本人研究者の留學生生活立ち上げを長年支援してきた日本人がおられ、その方の協力で日常生活自体は比較的スムーズにスタートできました。ただ、様々な国から研究者が集まった留学先研究室での生活は日本での研究者生活では味わったことのない経験であり、1年半の留学では



慣れえなかったことも多かったです。午後5時を過ぎるとほぼ全員が帰宅してしまうのは日本の研究室と大違いでカルチャーショックでしたし、35歳にして英語初級レベルの私には皆で賑やかに話しながらのランチもハードルの高いものでした。研究自体は年齢相応のスキルで乗り切れることは多かったのですが、ポストとのディスカッション、ラボセミナーでの自分自身の研究発表では英語初級者の私には苦勞が絶えませんでした。一方、日常生活でもスーパーでの買い物、ガソリンの給油、バス・電車の利用、飛行機国内線のチェックインなど、人生初めての経験だったことが多く、妻と二人、最初は本当に苦勞が多かった気がします。しかし、数ヶ月経つと、「二度とないアメリカ生活だから、苦勞にも向き合い、研究も日常生活も自分なりに精一杯楽しまない」と気持ちも少しは吹っ切れてきました。そのあとは自分なりに精一杯に楽しむという精神で気苦勞の多い中での1年半の留學生生活を妻と乗り切り、その中でアメリカ生活ならではの体験、多くの人との出会いを経験し、それらは10年経った今でも私にとって貴重な財産となっています。

アメリカ帰国から1年後、また突然のチャンスが訪れ、京都大学に勤めることになりました。神戸出身の私、関東出身の妻にとって京都に住むのは初めて、京都での日常生活もアメリカ生活と変わらずスタートには気苦勞が多く、大学生生活でも私立大学出身の私には目に見えない壁を感じつつ3、4年は過ごしたでしょうか。しかしある時、「京大教員という二度とないチャンスを得たのだから自分しかできない体験・出会いには精一杯向き合って、研究も生活も楽しもう」というアメリカ生活で感じた気持ちを思い出し、それから京都生活も楽しめるようになりました。アメリカ生活から10年、「自分に巡ってきたチャンスにはトライし、それで得た体験・人との出会いには精一杯向き合って楽しんでいきたい」という自分の転機となった精神を大事にしていきたいと今改めて思います。

（こばやし じゅんや 放射線生物研究センター・ゲノム動態研究部門准教授 専門は放射線生物学）

栄誉

伏木 亨 農学研究科教授が紫綬褒章を受章

このたび、わが国の学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、伏木 亨 農学研究科教授が、4月29日(火)に紫綬褒章を受章された。



同教授は、昭和50年3月京都大学農学部を卒業し、同大学院農学研究科修士課程、博士後期課程を修了し、同56年1月農学博士の学位を授与された。昭和55年4月京都大学農学部助手、同63年6月同助教授、平成6年4月同教授となり、同9年4月農学研究科への配置換えの後、同教授として今日に至る。この間、昭和61年9月より米国東カロライナ大学医学部に留学し、運動によってインスリン作用とは異なる機序で、筋肉細胞膜へのグルコース輸送担体の移動が起こることを明らかにし、運動による糖尿病改善に科学的な根拠を与える成果を挙げた。また、平成20年11月より1年11月間本学理事補を務め、同21年9月より3年間次世代研究者育成センター長(同24年4月より白眉センターに改称)を併任し、同24年10月より同センター顧問を務めている。

同教授は、独創的な視点と方法論を用いて食研究の科学的な基盤を一新する新しい物質や理論の発見を次々に達成した。さらに、高カロリーの油脂が魅力的なおいしさを与えるメカニズムを脳の報酬系刺激の視点から説明するとともに、舌の味細胞に油脂の受容体たんぱく質候補物質が発現していることを

発見した。また、日本を含むアジアの食に特徴的な出汁が、油脂と同じ報酬系の興奮を共有することを実験的に示し、うま味を中心とした日本的な食生活の価値を提唱した。

同教授の研究は、基礎から応用へと一貫しており、油脂受容の研究成果を基に低カロリーで満足感のある油脂を用いた菓子類の上市を達成した。さらに、重回帰分析によるおいしさの数式化を用いて、おいしさの新規な評価方法を創成し、様々な制限のある食生活において生活の質を高める食品の開発と実用化に貢献している。また、和食が日本人の健康に与える研究は、京料理の料理人とともに世界に向けて伝統的な食の見直しを啓発する活動に発展しており、平成16年には、国際味覚・嗅覚シンポジウムを京都で開催し、学会の発展に努めた。

これらの業績に対し、平成2年3月日本農芸化学会農芸化学奨励賞、同21年5月日本栄養・食糧学会賞、同25年3月日本農芸化学会賞、同21年3月安藤百福賞、同25年4月飯島食品科学賞を受賞した。

以上のように、同教授は、食に関する基礎から応用までの一貫して独創的な研究を行い、学会発展や研究者育成に努め、わが国の食品研究の科学的基盤を高めることに尽くしており、その功績はまことに顕著である。今回の紫綬褒章受章は、その功績が高く評価されたことによるものであり、誠に喜ばしい。

(大学院農学研究科)

田中 求物質-細胞統合システム拠点教授が平成26年度フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞を受賞

このたび、田中 求物質-細胞統合システム拠点教授が平成26年度フィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞を受賞された。同賞は、昭和54年より毎年、日独の文化と社会の相互理解促進に貢献した優れた日本人科学者にドイツ連邦共和国大統領から直接授与されるもので、日本人研究者を対象とする最も権威のあ



る賞とされる。

田中教授は、平成10年京都大学大学院工学研究科より博士号を得た後、日本学術振興会とフンボルト財団の奨学金を得てドイツ・ミュンヘン工科大学物理学部において博士研究員として研究を行った。平成13年にはドイツ外で学位取得をした科学者として初めて、ドイツ科学振興財団(DFG)よりエミー・ネッター賞を受賞した。また、同大学において独立研究グループを主宰し、同17年に同大学より上級学

位(物理学)を取得した。同年ハイデルベルク大学化学部正教授に就任, 同19年からは同大学物理学部正教授も兼任している。その後, 平成25年4月京都大学物質-細胞統合システム拠点教授となり現在に至る。

同教授は, 生命物理学, アクティブマターの物理学の分野において独創性の高い業績を挙げてきた。ソフトマター物性物理学の分野では, メゾスケール構造(10 nm~1 μm)とその力学特性を定量的に計測, 評価するために, 最先端のX線/中性子散乱実験を進め, 世界の中でもこの分野のパイオニアとされる。その業績を評価され, ラウエ・ランジュヴァン研究所生物物理部門のプログラム委員や, 欧州放射光施設のソフトマター物理部門の科学協議委員を務め, 当該分野において世界的なリーダーとしての役割を果たしている。近年は, 細胞膜モデルや刺激応答性を持った高分子材料を用いて, 細胞を取り巻く微小環境を能動的に時空間的制御する手法と非平

衡統計力学の手法を組み合わせ, 細胞の分化や発生を制御する基本原則を解明する「アクティブバイオマター物理」という新たな研究分野を提案し, 医学や細胞生物学との分野の境界を超えた活発な共同研究を行ってきた。

同教授は日本とドイツの学術交流に多大な貢献をしており, 平成22年にスタートした日独6大学交流協定(HeKKSaGOn Alliance)において, ドイツ側の議長校・ハイデルベルク大学と本学の架け橋として中心的な役割を果たし, 同24年には第1回HeKKSaGOn Summer Schoolを主催した。

今回の受賞は, これまでの同教授の独創性に富んだ学術上の業績と日独の学術・文化交流への貢献が高く評価されたものである。今年5月に本学の欧州拠点がハイデルベルクに設立されたこともあり, 本学の国際展開をドイツのみならず欧州レベルにおいて大いにアピールする上でも大変喜ばしい。

(物質-細胞統合システム拠点)

資料

平成26年度 入学試験諸統計

1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入 学 辞 退 者 数	追 加 合 格 者 数	入学者数
総合人間学 部	前期(文系)	65 [^]	207 [^]	207 [^]	202 [^]	67 [^]	[^]	[^]	124 [^]
	前期(理系)	55	247	193	192	57			
文学部	前 期	220	647	647	639	227	1		226
教育学部	前期(文系)	50	159	159	157	50			62
	前期(理系)	10	44	44	43	12			
法学部	前 期	320	857	856	842	332	1		331
経済学部	前期(一般)	180	485	484	474	190			238
	前期(論文)	25	106	88	88	25	2		
	前期(理系)	25	128	108	105	25			
理学部	前 期	311	805	795	793	315			315
医学部	前 期	250	673	658	647	269	5		264
薬学部	前 期	80	232	231	224	82			82
工学部	前 期	955	2,867	2,866	2,835	970	1		969
農学部	前 期	300	898	896	884	314			314
合 計		2,846	8,355	8,232	8,125	2,935	10	0	2,925

〈医学部学科専攻別，薬学部・工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	入学者数
医学部	前期	250 ^人	673 ^人	658 ^人	647 ^人	269 ^人	5 ^人	264 ^人
医 学 科	前期	107	326	311	309	112	1	111
人間健康科学科	前期	143	347	347	338	157	4	153
看護学専攻	前期	70	159	159	155	74	3	71
検査技術科学専攻	前期	37	99	99	96	41	1	40
理学療法学専攻	前期	18	39	39	38	20		20
作業療法学専攻	前期	18	50	50	49	22		22
薬学部	前期	80	232	231	224	82		82
薬 科 学 科	前期	50	123	122	119	51		51
薬 学 科	前期	30	109	109	105	31		31
工学部	前期	955 ^人	2,867 ^人	2,866 ^人	2,835 ^人	970 ^人	1 ^人	969 ^人
地 球 工 学 科	前期	185	379	379		185	1	184
建 築 学 科	前期	80	318	318		82		82
物 理 工 学 科	前期	235	777	777		238		238
電 気 電 子 工 学 科	前期	130	407	407		133		133
情 報 学 科	前期	90	341	340		92		92
工 業 化 学 科	前期	235	645	645		240		240
農学部	前期	300	898	896	884	314		314
資源生物科学科	前期	94	—	—	—	96		96
応用生命科学科	前期	47	—	—	—	49		49
地域環境工学科	前期	37	—	—	—	40		40
食料・環境経済学科	前期	32	—	—	—	34		34
森 林 科 学 科	前期	57	—	—	—	59		59
食品生物科学科	前期	33	—	—	—	36		36

※工学部の学科別志願者数及び第1段階選抜合格者数は，第1志望学科の数を示す。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法 学 部	10人以内	27 ^人	17 ^人	11 ^人	5 ^人	4 ^人
経済学部	10人以内	27	15	15	7	3

2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部		日 程	満 点	総 点			
				最 高 点	最 低 点	平 均 点	
総 合 人 間 学 部		前 期	(文 系)	800 点	620.16 点	465.66 点	509.69 点
			(理 系)	800	614.00	428.50	470.10
文 学 部		前 期	750	606.41	483.00	516.39	
教 育 学 部		前 期	(文 系)	900	715.16	565.33	600.33
			(理 系)	900	671.11	580.13	612.63
法 学 部		前 期	750	616.55	480.60	515.55	
経 済 学 部		前 期	(一 般)	800	646.10	531.30	566.75
			(論 文)	600	332.25	243.66	272.73
			(理 系)	900	661.05	569.56	609.55
理 学 部		前 期	1,200	1,018.95	726.25	800.78	
医学部	医 学 科	前 期		1,300	1,072.85	900.90	957.07
	人 間 健 康 科 学		看 護 学 専 攻	1,200	755.86	585.60	635.45
			検 査 技 術 科 学 専 攻	1,200	837.43	711.96	756.19
			理 学 療 法 学 専 攻	1,200	906.83	661.06	731.09
			作 業 療 法 学 専 攻	1,200	761.46	625.30	683.64
薬学部	薬 科 学 科	前 期	950	771.00	580.25	634.76	
	薬 学 科		950	713.65	601.10	646.29	
工学部	地 球 工 学 科	前 期	1,000	759.41	560.15	591.99	
	建 築 学 科		1,000	723.96	572.03	614.37	
	物 理 工 学 科		1,000	773.33	593.96	645.62	
	電 気 電 子 工 学 科		1,000	796.25	576.18	616.26	
	情 報 学 科		1,000	782.05	578.15	629.81	
	工 業 化 学 科		1,000	734.60	568.43	609.56	
農 学 部		前 期	1,050	872.63	631.13	679.55	

(備考) 1. 法学部・経済学部の外国学校出身者のための選考を除く。
2. 総点については、前期合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県	学 部												計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農		
							医学科	人間健康科学科					
北海道	9	7	2	7	13	14	4	3	7	42	13	121	
青森		1	1	1		3			1	3	2	12	
岩手		1	1		4	1			1	3	1	12	
宮城	6	3	1	3	7	4		3	2	25	4	58	
秋田	2	1	1	1		4	1	1		2	2	15	
山形	2	4		1		1			1	2	1	12	
福島	5	4	2	2	2	5	1	1	1	5	5	33	
茨城	9	5	3	2	6	10		5	1	28	10	79	
栃木	4	2	1	2	2	6		3	2	7	5	34	
群馬	5	3	2	3	3	8		2	2	19	7	54	
埼玉	11	11	3	5	18	9	2	4	4	40	10	117	
千葉	13	6	7	9	15	23	2	6	4	44	13	142	
東京	70	81	18	57	73	83	18	12	9	147	69	637	
神奈川	17	18	7	27	26	20	4	4	3	81	17	224	
新潟	7	10	3	4	6	8		7	1	18	5	69	
富山	3	10		3	5	5		1		22	4	53	
石川	2	13		11	6	10	5	5	1	31	11	95	
福井	6	6	2	7	6	13	2	2	2	27	5	78	
山梨		4	3	2	1					3	1	14	
長野	6	9	2	7	5	10	3	4	4	19	9	78	
岐阜	6	11	2	18	10	12	2	13	1	38	13	126	
静岡	15	14	8	10	13	22	8	5	4	40	8	147	
愛知	28	30	16	62	58	50	11	12	18	212	49	546	

都道府県	学 部												計
	総合人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農		
							医学科	人間健康科学科					
三重	8	10	7	14	10	12	6	11	3	49	14	144	
滋賀	9	11	7	10	12	11	4	8	7	91	23	193	
京都	33	60	17	93	76	67	49	36	28	316	105	880	
大阪	60	80	31	164	127	113	43	89	44	552	197	1500	
兵庫	19	57	13	72	66	53	72	26	25	312	74	789	
奈良	15	31	7	77	36	30	42	17	13	234	62	564	
和歌山	5	8	1	13	6	6	8	9	2	43	9	110	
鳥取	2	4	2	1	1	6		3		6	2	27	
島根		2		2		1	2	2		4	2	15	
岡山	6	18	1	17	10	11	2	10	6	40	17	138	
広島	15	26	3	37	14	40	4	11	11	79	19	259	
山口	1	7	2	8	6	11	2	1	3	14	4	59	
徳島	3	2		6	1	4	2		3	10	6	37	
香川	1	3		15	2	7	4	1	3	26	12	74	
愛媛	4	7	2	11	4	12	3	6	2	24	12	87	
高知	2	5	3	4	4	5		1	1	11	6	42	
福岡	15	18	8	36	33	36	6	2	7	90	26	277	
佐賀	1	11		1	2	9		4		9	1	38	
長崎	2	4	2	5	4	5	1	2		14	5	44	
熊本	7	5	2	4	7	6		4	1	23	12	71	
大分	4	2	1	3	1	3	1	2	1	11	7	33	
宮崎	2	1		3		2	2	1		9	5	25	
鹿児島	7	2	1	2	5	7	2	2	1	11	6	46	
沖縄	2	3	1		2	5	1	1		10		25	
合計	447	639	198	847	710	793	326	344	229	2854	890	8277	
	124	224	62	331	237	312	111	153	82	968	314	2918	

[備考] 外国学校出身者のための選考を除く。

大学入試センター試験及び個別学力検査において受理された出願資格が、ともに高等学校又は中等教育学校卒業（出願時見込みを含む）である者のみ各欄に含む。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 26.3卒	浪 人 25.3以前卒	総 数	現 役 26.3卒	浪 人 25.3以前卒
総合人間学部	454	262	192	124	71	53
	認 6 他 1		認 6 他 1			
		57.7%	42.3%		57.3%	42.7%
文 学 部	647	432	215	226	153	73
	認 8	認 2	認 6	認 2		認 2
		66.8%	33.2%		67.7%	32.3%
教 育 学 部	203	131	72	62	43	19
	認 5		認 5			
		64.5%	35.5%		69.4%	30.6%
法 学 部	857	538	319	331	197	134
	認 9 他 1	認 2	認 7 他 1			
		62.8%	37.2%		59.5%	40.5%
経 済 学 部	719	442	277	238	140	98
	認 7 他 2	認 3 他 1	認 4 他 1	認 1		認 1
		61.5%	38.5%		58.8%	41.2%
理 学 部	805	531	274	315	199	116
	認 11 他 1	認 7 他 1	認 4	認 3	認 1	認 2
		66.0%	34.0%		63.2%	36.8%
医 学 部 科	326	171	155	111	59	52
		52.5%	47.5%		53.2%	46.8%
医 学 部 人間健康科学科	347	197	150	153	85	68
	認 2 他 1		認 2 他 1			
		56.8%	43.2%		55.6%	44.4%
薬 学 部	232	145	87	82	50	32
	認 3	認 1	認 2			
		62.5%	37.5%		61.0%	39.0%
工 学 部	2,867	1,770	1,097	969	551	418
	認 13	認 4	認 9	認 1		認 1
		61.7%	38.3%		56.9%	43.1%
農 学 部	898	576	322	314	181	133
	認 8	認 3	認 5			
		64.1%	35.9%		57.6%	42.4%
合 計	8,355	5,195	3,160	2,925	1,729	1,196
	認 72 他 6	認 22 他 2	認 50 他 4	認 7	認 1	認 6
		62.2%	37.8%		59.1%	40.9%

(備考) 認…高等学校卒業程度認定試験合格者(大学入学資格検定合格者含む)
 他…その他の入学資格取得者
 認, 他は内数

[外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調 (外数)]

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 26.3卒	浪 人 25.3以前卒	総 数	現 役 26.3卒	浪 人 25.3以前卒
法 学 部	27	27	0	4	4	0
		100.0%	0.0%		100.0%	0.0%
経 済 学 部	27	25	2	3	3	0
		92.6%	7.4%		100.0%	0.0%

(学務部)

平成26年度 総長裁量経費による採択事項

平成26年度の総長裁量経費については、下記の26件が採択された。
採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
最も優秀な課程博士論文の出版助成制度	文学研究科	
若手研究者出版助成事業	教育学研究科	
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科	
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科	
国際化に対応した学事暦、国際連携授業・学位の導入に関する調査分析実施経費	経済学研究科	
宇宙学拠点形成と連動した学生による主体的な学際融合研究及び社会連携活動の支援	理学研究科	学際融合教育研究推進センター
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科	
最新研究成果を紹介・解説する動画の作成およびオープンコースウェアを利用した学内外への発信	生命科学研究科	
地球規模の環境問題を解決しうる創造性豊かなグローバル人材の育成事業	地球環境学学	
地球環境学学出版助成事業	地球環境学学	
若手研究者に係る出版助成事業	経営管理研究部	
若手研究者による人文科学諸分野の優れた研究成果の刊行助成事業	人文科学研究科	
遠隔地施設における ICT 環境改善	生存圏研究所	理学研究科, 防災研究所
若手研究者の論文出版支援事業	防災研究所	
東南アジア研究に関わる若手出版助成	東南アジア研究所	
HeKKSaGOn(ヘキサゴン)コンソーシアム活用の外国語学習・異文化理解促進による国際化推進事業	学術情報メディアセンター	人間・環境学研究科, 国際高等教育院, 情報環境機構
京都大学バリアフリーシンポジウムプロジェクト	学生総合支援センター	理学研究科, 学務部
TOEICレヴェルアップ夏季集中講座—プラス100点を目標に—の開催	国際高等教育院	
リスニング強化のためにシャドーイング訓練を自主学習でできるシステムを構築する	国際高等教育院	
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター	
edXへ講義配信, 教育のビックデータからの分析, ICTを使った講義開発	情報部(情報環境機構)	物質-細胞統合システム拠点
京都大学のスーパーグローバルユニバーシティ(SGU)構想の実施準備事業	事務本部(総務部(学際融合教育研究推進センター))	
分野横断促進をねらったオープンプラットフォームの構築	事務本部(総務部(学際融合教育研究推進センター))	
広報センターにおける情報発信機能の強化	事務本部(渉外部)	
高大接続型入試改革のモデルとなる京都大学特色入試の導入と整備 —サンプル問題の作成及び広報活動の戦略的展開—	事務本部(学務部)	文学部, 教育学部, 法学部, 経済学部, 理学部, 医学部, 薬学部, 工学部, 農学部, 総合人間学部
京都大学高大連携事業「学びコーディネーター」の拡充	事務本部(学務部)	

(財務部)

話題

第20回大学教育研究フォーラムを開催

3月18日(火)と19日(水)に、吉田南構内および百周年時計台記念館において、第20回大学教育研究フォーラムが開催された。

初日に開催された「学生の学びをどうデータ化し、どう利用するか?」と題されたシンポジウムでは、松本 紘総長の挨拶に続き、小野和宏新潟大学歯学部教授・副学部長、久保猛志金沢工業大学副学長・教育点検評価支援担当、上杉志成物質-細胞統合システム拠点教授・副拠点長、岡田圭子獨協大学経済学部教授・全カリ英語部門担当・GP事業推進責任者から報告が行われ、指定討論者の秋山卓也文部科学省高等教育局高等教育企画課高等教育政策室室長補佐からコメントがあった。その後、会場の参加者を含め、学生の学びに関するデータの管理や活用について、活発な意見交換が行われた。

個人研究発表は、2日間にわたり24の会場で、大学教育改善の実践研究に関する発表計92件が行われた。また小講演が8件開かれ、高等教育における課題や最先端の取り組みについて報告があった。2日

目の最後には8件の参加者企画セッションが行われ、各大学における実践に関して各会場で活発な討論が交わされた。

この大学教育研究フォーラムには、2日間で学内外の大学関係者計591名の参加があり、本学および全国の大学の教育改善のためのリソースが集積したといえる。また、初日のシンポジウム終了後の情報交換会も、多くの参加者が一層の交流を深めるなど、盛会のうちに終了した。



会場の参加者も含めての意見交換

(高等教育研究開発推進センター)

「インドシナ地域における教育・研究連携に向けた第7回ワークショップ」を開催

地球環境学堂・学舎は、平成22年からインドシナ地域諸大学との教育・研究連携ネットワークを構築している。このたび、第7回ワークショップを3月25日(火)に本学で開催した。6カ国9大学の副学長、学部長をはじめとする代表者が集い、地球環境学堂・学舎および関連部局からの参加者約35名とともに熱心な討議が行われた。本学が推進しているASEAN諸国大学との連携強化に向けて、これまでの協同実績を踏まえてさらに魅力的な教育プログラムを構築することをめざし、各大学の大学院教育システムの

特徴や国際カリキュラムの現状についての理解共有と課題整理が図られた。今後、ダブルディグリーなどの教育協同に向けて具体的な議論を重ね、ASEANをはじめとするアジア諸国の大学教育において本学が一層の役割を果たすことが期待される。

※参加大学

ハノイ理科大学、フエ農林大学(ベトナム)、マヒドン大学、コンケン大学(タイ)、ポゴール農業大学、バンドン工科大学(インドネシア)、王立農業大学(カンボジア)、チャンパサック大学(ラオス)、清華大学(中国)



ワークショップ参加者集合写真

(大学院地球環境学堂・学舎)

体育会による壮行会を開催

4月28日(月)、百周年時計台記念館前広場にて体育会の壮行会が開催された。

この催しは、毎年体育会各所属団体の活躍と体育会全体の発展を期して行われているもので、体育会所属の全クラブのメンバーが集結したほか、昼休みの時間帯とあって、多くの学生が集まった。

当日は松本 紘総長、赤松明彦学生担当理事・副学長、小田滋晃体育会会長が出席し、松本総長から、「学業との両立は簡単ではありませんが、昨年^{さとし}の全日本学生ボードセーリング選手権において全国制覇されたウインドサーフィン部、京都マラソンで優勝を果たされた陸上競技部の横山裕樹さんなど、輝かしい成績を残している部もたくさんあります。学生諸君には、スポーツを通じて友達を増やし、人間関係を形成していただきたい」と激励の言葉が寄せられた。

また、小田会長から、「今年度、本学が主管校となっている七大戦において、すでに三つの競技が終了し

ており、今後出場される部においても日頃の練習の成果をいかんなく発揮し、総合優勝を目指して正々堂々と戦われることを期待しています」とのメッセージが寄せられた。

硬式野球部・藤沢祐樹主将の宣誓の後、応援団による気迫溢れる演舞演奏が行われ、体育会壮行会を大いに盛り上げた。



挨拶を述べる松本総長

(学務部)

訃報

このたび、^{さとむらたけひこ}里村雄彦教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

里村 雄彦 教授



里村雄彦先生は、3月3日逝去された。享年60。

先生は、昭和51年3月京大^{きやうだい}理学部を卒業、同年4月東京大学大学院理学系研究科を経て気象庁に入庁され、気象庁高松地方气象台予報課、

気象庁気象研究所応用気象研究部で勤められた。その間、フランス気象研究センター客員研究員、フランス国立科学研究センター客員研究員、筑波大学地球科学系連携併任助教授、国立環境研究所客員研究員も務められた。

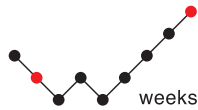
平成7年9月京都大学大学院理学研究科助教授を経て、同19年3月同教授に就任され、理学研究科地球惑星科学専攻大気圏物理学講座を担当された。

先生は、長年にわたってメソスケール大気物理学

の研究・教育に努められ、特に、急峻な山岳があっても精度良く流体計算ができる数値気候モデルの開発は、高い評価を受けている。また、地球全体の大気運動を駆動する主な熱源である、熱帯、とりわけ東南アジア域の降水システムについて多くの研究成果を挙げるとともに、現地の研究者や気象業務担当者を指導され、東南アジア域における気象観測の発展に貢献された。

また、学内では理学研究科地球惑星科学専攻長をはじめとして大学運営に貢献され、学外では理事として日本気象学会の運営に貢献された。さらに、独立行政法人大学評価・学位授与機構理学専門委員会物理学・地学系部会委員として我が国の高等教育の発展にも尽力された。

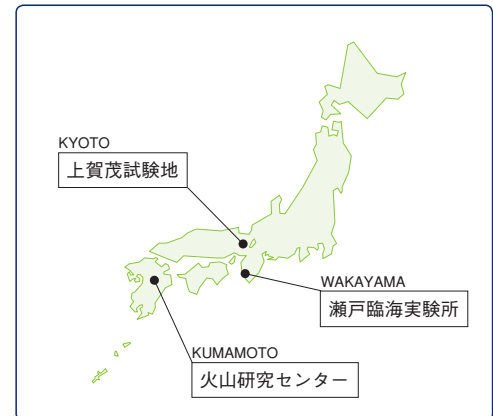
(大学院理学研究科)



京大ウィークス2013 Vol.7

「京大ウィークス」は、京都大学が日本全国各地に数多く所有する、多様な隔地施設の活動を学内外に紹介することを目的に、従来からそれぞれの施設で行ってきた公開イベントを、毎年秋の一定期間に集中して行う企画である。今年度は、21の施設が参加して10月12日(土)から11月9日(土)までの期間で実施した。

今号では、理学研究科の「火山研究センター 登録有形文化財記念講演会」、フィールド科学教育研究センターの「瀬戸臨海実験所 施設見学会」および「上賀茂試験地 秋の自然観察会」を紹介する。



火山研究センター 登録有形文化財記念講演会

理学研究科附属地球熱学研究施設火山研究センター(熊本県阿蘇郡南阿蘇村)では、南阿蘇村教育委員会との連携により、10月31日(木)に登録有形文化財記念講演会を開催した。

このイベントは、同センター本館が国の登録有形文化財(建造物)に登録されたことを機に、京都大学としての活動や火山研究を地元へ周知し、かつ地元と本学との連携をさらに強固なものとするを目的としたもので、当日は、「南海トラフ巨大地震と九州の地震：大地動乱の時代」、「火山のお医者さん阿蘇を診る」の二つの講演を行った後、同センターの職員が、南阿蘇村長陽体育館の会場に展示したポスターによりセンターの研究について説明を行った。

講演には、地元中学生270名も含め、合計350名の参加があり、参加者からは、「京大の方と聞いてとても固いイメージがあったが、冗談も交えて話をして下さったのでとても面白かった。また来年来たいと思った」、「どちらの先生のお話もわかりやすく、生徒達も良く聞いていた。特に自分たちの村に直接関わるお話なので興味深く拝聴した」などの声が寄せられた。



展示物を見る参加者



講演の様子

瀬戸臨海実験所 施設見学会

フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所(和歌山県西牟婁郡白浜町)において、10月26日(土)に施設見学会を開催した。

台風27号の接近による荒天・高波により、当初予定していた実験所船舶を利用しての畠島実験地渡航・見学は前日のうちに中止を決定し、同実験所附設の水族館見学に差し替えての開催となった。

当日は、実験所の歴史と役割、畠島実験地についての講演を行った後、教員の案内による同実験所の研究教育施設と水族館の見学を行った。

水族館の見学では、一般の見学者が普段見ることのできないバックヤードも案内し、水槽を管理する様々な設備の説明や、餌の準備など、水族館の裏側で日々行われている業務等について解説を行った。

畠島実験地見学の中止・差し替えに伴い一部キャンセルが出たものの、当日は15名の参加があり、参加者からは、畠島実験地見学の中止を惜しむ声もあったが、「水族館のバックヤード等を説明いただいて良かったです」、「図書館の洋書に非常に興味を持ちました。閲覧できるならしてみたいと思いました」、「次回の見学会にもぜひ参加したいと思います」との声が寄せられた。



水族館のバックヤード等で教員の解説を聞く参加者

上賀茂試験地 秋の自然観察会

フィールド科学教育研究センター上賀茂試験地(京都市北区上賀茂)において、11月9日(土)に秋の自然観察会を開催した。

定員を大幅に超える応募があったため、抽選を行い、当日は29名の参加となった。

午前中は、講義室で施設概要の説明の後、3班に分かれて約2kmの観察会コースを約2時間で回った。試験地内の様々な樹木の解説、落ち葉や木の実の採集など、参加者は紅葉の始まった森での散策を楽しんでいた。

昼食休憩後の午後には、参加者の選択により2班に分かれ、1班は事務所周辺の見本林・温室・標本館を教員の解説で散策した。珍しい外国種の植物や標本を前に、参加者は熱心にメモをとり、質問が途切れることがなかった。

もう1班は、試験地内で採取した珍しい松ぼっくりや木の実などを材料として、クリスマスリースなどを作成した。

参加者からは「小人数で先生に細やかに説明していただいたので楽しかった」、「多様な樹木の説明を受けて楽しかった」、「わかりやすく、素人にも楽しめた」、「一つ一つの樹種についての解説だけでなく、昆虫や鳥類、菌類との関係についてももっと聴きたいと思った」などの声が寄せられた。



林内散策(センペルセコイアの説明)



いろいろな樹木の観察



温室見学



リース作り体験